小倉屋酒店沿革

初代小倉屋半右衛門は九州小倉の人で延宝年間（一六七〇年頃）に小倉屋という酒屋を当地にひらいたといわれています。当時の馬場下周辺は榎町の済松寺領地で小旗本の住まいや、三代将軍家光死去のさい、召し放ちになった女中たちが住まったらしい、比丘尼屋敷などがある町だったようです。高田馬場は寛永一三年（一六三七年）にできていて、高田馬場の坂下だから馬場下町といわれ近所に誓閑寺横町、馬場下横町などあったようです。

三角の辻で、私どもの店の記載は馬場下札の辻東角とされています。この、高札場は小さな馬場下一町では費用を賄いきれず、早稲田町、馬場下町、馬場下横町の持ちあいで維持していたようです。江戸城総構築（一六三六年）が竣工し、明暦の大火（明暦三年　一六五七年）で三分の一を焼失した江戸の町が復旧、新しい町が周囲に開かれた頃にあたります。茗荷畠や田圃のなかに大名の下屋敷、旗本屋敷やその使用人たちに酒を売っていたと云われます。延宝から元禄にかけては町人文化の勃興期で江戸の人口増加は著しく、また男子多数のいびつな社会であったので酒はかなり売れたようです。当時はまだ居酒屋という商売が成立する以前で自らの住まいで飲まれるのが普通で、異常なほどの量の酒が消費された時代でした。付近一帯は正保三年（一六四六年）から済松寺領地になっていました。

吉村薬局から早稲田実業前をとおり正門通りに抜ける道は昭和三十年代のはじめに開通したもので、それまでは三つ角の交差点でした。現存している古い写真の店は昭和十年頃、現在の早稲田通りができる際に取り壊された家で、

約百年経っていたと言われています。安政六年（一八五六年）二月の青山の大火にも焼け残り火事の多い当時としては珍しい古い家だったようです。幕末の世情不安と物価上昇のため打ち壊しが発生した際も、ご近所の米屋は被害にあっているが、どうやらうまくきりぬけたようです。夏目漱石が「硝子戸の中」に書いているのはこの頃の事ですが、この強盗にかなり持って行かれたのが真相です。

堀部安兵衛が高田馬場に駆けつける際、立ち寄ったとされているのは、元禄七年（一六九四年）二代目半右衛門の頃のことです。当時は灘、伊丹から運び込まれる高価な下り酒と地回りの安酒を併売していたので彼が飲んだのは後者のアルコール分の低い酒だったといわれています。安兵衛は当初、中山新五郎といい越後新発田溝口藩の家臣の息子でした。

現在、新潟県新発田市役所（新発田城趾）に父の死後、江戸に向かって出立しようとしている安兵衛の銅像が建っていますが、これは昭和三八年頃、新発田市観光協会がこれにちなんで作ったものです。顔立ちは私ども保存の、討ち入り後の安兵衛肖像に似せてあります。

中山新五郎は江戸に出、市ヶ谷加賀屋敷地にすみ、旗本稲生七郎右衛門の中小姓をして、小石川牛天神下の堀内源太左右衛門正春に剣を学んでいた際、知己となった松平左京大夫の家来、菅野六郎左衛門に肉親同様に可愛がられ、義理の叔父甥の盟をむすんでいた。元禄七年（一六九四年）二月一一日に菅野は家中の村上兄弟に決闘を申し込まれる。遺恨の原因は分かっていない。六郎左右衛門は家来角田某と

若党一人を伴って高田の馬場に向かったが、妻女に新五郎へ渡す助太刀の依頼状を託した。おなじみの講談「飲兵衛安」だと日本橋八丁堀から駆けつけたことになっているが、実際は牛込軽子坂あたりからと言われている。菅野六郎左衛門は深手を負い帰宅の途中で落命したが新五郎は見事相手方を討ち果たした。この事件を契機に播磨赤穂五万石浅野家家臣堀部家に養子に入り、後に堀部安兵衛と名乗り勇名を馳せた人です。

幕末の頃になると、小金井から牛込に進出していた天然理心流の剣術の免許皆伝をうけたり、ご家人株を手に入れた人もでています。慶応二年（一八六六年）には市中打ち壊しが勃発してその被害が四谷、牛込にも及び、早稲田町、馬場下町でも数軒被害をうけたが、我が家は無事切り抜けている。明治から大正にかけての沽券図によれば敷地一五七坪の大店で、後には郵便局も兼営していました。

同じ「硝子の中」に「その代り娘の御北さんの長唄は何度となく聞いた。私は小供だから上手だか下手だかまるで解らなかったけれども、私の家の玄関から表へ出る敷石の上に立って、通りへでも行こうとすると、御北さんの声が其所から能く聞こえたのである。春の日の午過などに、私は恍惚とした魂を、麗らかな光に包みながら、御北さんのお浚いを聴くでもなく聴かぬでもなく、ぼんやり私の家の土蔵の白壁に身をもたせて、佇立んでいた事がある。」と活写しているが、その、お北さんは、私どもの祖母の姉にあたる人です。漱石が半兵衛と書いているのは代々の半右衛門のことです。　私の祖父は十四代半右衛門を名乗らず靜助でした。

その後、父鶴吉があとを継ぎ、昭和十年前後に夏目坂通り、早稲田通りと二回の道路拡幅で現在の形になりました。昭和十五年の戦時企業整備で酒店をいったん閉じ、酒場や国民酒場を経営、戦後ふたたび、小売酒販免許を取得して酒屋を再開いたしました。

現在、私どもにある堀部弥兵衛、安兵衛親子の肖像は吉良邸討ち入りのあと、泉岳寺で処分まちの間に、弥兵衛の姻戚、能登藩の忠見氏が絵師を同道して描かせたものから、大正年間、祖父が模写させてもらってものです。祖父がお願いした忠見慶造さんの子孫は昭和四十年代にＮＨＫに調べてもらいましたが、わかりませんでした。

他に古い文献では、延宝年間に書かれた、牛込済松寺横町にすむ、伊助という人を雇ったときの年季奉公証文が残ってはいますが、これは堀部安兵衛とは関係ありません。しかしお仕着せをお四季着せとかいたり、宗旨は代々日蓮宗にしてとか、博打は一切しないとか身元引受人をたてきちんと書かれていて、大変興味深いものです。

昭和三二年、鶴吉は病に倒れ、その後五十年に亡くなりました。現在の店舗は昭和四十八年の建築、フアサードと内装は平成元年春改装したものです。ワインの取扱をはじめたのは昭和三十九年（一九六四年）から太平醸造のサントネージュとキッコーマンのマンズワインが最初です。その後ボチボチ品揃えを始め、ワイン洋酒主体の営業形態を指向したのは昭和五十年頃からと思います。